

信毎俳壇

神野 紗希 選

薄氷に透け居て錦鯉おぼろ

(小諸市) 清水 順子

吾が腕を擽げたきかな接穂として

(小諸市) 加藤 陽介

ふらみんこはぶたのなきかたなんだはる

(中野市) 風間 一乃

三月の髪なひかせる祈りかな

(中野市) 石田 一石

直線がおさまりきらず春の画布

(長野市) 水木 朱実

湖風や岸の芽柳ひと口揺る

(長野市) 粟津原吉弘

ぼつてりと縁切寺の夕桜

(塩尻市) 百瀬 はな

その昔村の茶毘所や雪の降り

(長野市) 小池 秀雄

羊水をなめる母牛春満月

(松本市) 中村 百仙

振り向かず曲がり行く猫雪解道

(飯綱町) 坂井 寿男

オーロラを振りし便りや春の闇

(諏訪市) 小林さよ子

春光や机に俳句入門書

(佐久市) 白井 純子

選評

一句目、薄氷の下を泳ぐ錦鯉が、うつすらとおぼろげに透けている。錦鯉の体温やゆったりとした動きから、ぬるく春の暖が兆す。二句目、春の季語「接穂」とは、接ぎ木の際に接ぐ枝のこと。擽げ

た腕が木を強化するのなら、それは喪失であるとともに、新たな融合でもある。その恍惚。三句目、フラミンゴの声はたしかに濁って力強い。それを豚の鳴き方に似ていると発見した。楽しく振る命の春。

坊城 俊樹 選

三日後に消ゆる定めの雪掻きぬ

(佐久市) 高岡 道明

靴底に地球の鼓動下萌ゆる

(佐久市) 市川小夜子

卒業季光の中に一人つつ

(伊那市) 中村 初治

手を焙り次の加筆を見つめる絵

(長野市) 小池 秀雄

薄氷や内なる水の轟ける

(須坂市) 東島賀代子

名残雪傍で亡き妻口遊ぶ

(松川村) 岡 豊村

父と子のヘディングこつこつ春の風

(長野市) 宮沢 義親

若き日の闘志恋しき虚子息かな

(飯綱町) 坂井 寿男

ネオン消え駅前広場返る

(飯綱町) 小林 紀子

父の記憶何にもなくて春の虹

(長野市) 清水美佐子

補聴器の雑音ひとつ万愚節

(中野市) 芋川 菊水

一本は風に揺れたる軒つらら

(大町市) 原田 勝

選評

一句目、降雪も三日もたてば解けて消えてゆく。しかし降り続く雪と日々戦う人々の生活はそうも言ってもらえない。それも雪国の定め。二句目、春の下萌えとは地下にある命の芽吹き。それそのもの

が地球の鼓動とも思える。それを靴底に感じるという俳味。三句目、卒業生たちが勢ぞろいしている。その一人一人に射す窓からの光。それぞれの光こそ将来への希望の光なのかもしれぬ。

今井 聖 選

叱られし後も炬燵に入りしまま

(長野市) 竹前 正人

バリウムと逆流に耐へ春を待つ

(上田市) 竹内 重美

二度目の雪掻いて明日の空覗む

(佐久市) 依田 俊

新しき地図の生まるる下萌に

(伊那市) 小切 三郎

春耕やまづは園医者に予約して

(飯綱町) 小林 紀子

血洗ひせよと妻の目春炬燵

(佐久市) 吉岡 徹

雛の間に入れば緋色に染まる頬

(佐久市) 町田ゆかり

お喋りの三月来る公民館

(佐久市) 西田 和彦

踏切りの上がり春塵容赦なし

(岡谷市) 吉池富貴男

蒲公英や辞令は遠き山の果て

(愛知県大山市) 紅紫あやめ

春タペマリオネットの鼻高し

(小諸市) 加藤 陽介

啓蟄の郷に朝寝の仔狼かな

(松本市) 伊藤 和夫

選評

一句目、炬燵で話をしている叱られた。叱った方はプイと出て行ったが叱られた方は炬燵に入って嫌な思いに耐えている。心理的な推移が出ている。二句目、検査の折、造影剤の逆流に耐えている。

「春」は身体の回復の隠喩も含む。三句目、降り続く雪を掻きながら明日は晴れてくれよと願う気持ちが出ている。四句目、地の色が緑に変わる季節はまるで新しい地図が生まれるかのようだ。